

テレビ視聴行動認識の一視角

——家族集団のテレビ視聴をめぐって——

一、まえがき

北村日出夫

昭和二八年一〇月二七日、白井対アレンのプロ・ボクシング世界選手権試合の中継の夜、街頭テレビの前に集った大群衆が、通りにはみ出て、交通を止めたため、中継をしていたアナウンサーが、「街頭のみなさん、押し合わないで下さい」と連呼した話⁽¹⁾は、テレビ放送初期の一つの状態を生き生きと物語っている。

それから十二年後——昭和四〇年一月三〇日、原田対ラドキンのプロ・ボクシング世界選手権試合(原田の第一回タイトル防衛戦)の中継の夜のことを考えてみると、テレビ視聴の様子はすっかり変わってしまった。街頭テレビはすでにほとんど姿を消し、恐らく多くの人たちは、家のコタツにあたりながら、原田とラドキンの打ち合いを見ていたことであろう。あるいは、家の一台のテレビを前に、ボクシングを見るか、「ジェスチャー」を見るか、家族の間で、いざこざが起ったところも多かっただろう。

NHKの『放送学研究』8・9・10号では、このテレビの一〇余年の急激な普及のプロセスを、総合的な見地から「草創胎動期」「飛躍的発展期」「大衆化現象期」の三つに時期区分をしている⁽²⁾。また、テレビ・セットの設置場所を一つのメルクマールとしてみれば、この時期区分にかなり重なりながら、「街頭用テレビの時期」「営業用テレビの時

期」そして「家庭用テレビの時期」という見方もできる。

冒頭に引用した白井対アレンの中継はまさに「街頭用テレビの時期」の代表的な出来事であるし、原田対ラドキンの中継は「家庭用テレビの時期」のものである。

この時期区分を将来に延長して考えると、次に「個人用テレビの時期」を想定することができる。事実、テレビ・セットを二台以上もっている家庭は、わずかずつではあるが、増加してきている。しかし、テレビがラジオと同じように個人化する時期はだいぶん先のことで、現在のところ、一家庭一台という状態が圧倒的に多く、このような家庭を対象に「家庭用テレビの時期」を考えるのもっとも妥当であろう。

これをたんに普及の面からみれば「複数メンバーで構成される家族という単位に、一台はいればよいという条件が、テレビをして、一家の最大公約数たらしめるのである」という認識(3)もなりたつ。しかし、一台のテレビを複数のメンバーがどのようなみかたをするかという面からみれば、小集団としての家族の中で、この「一台」が別の重要な意味を持つてくる。

テレビが家庭の中に入ることによって、たとえば、家族成員間のコミュニケーション活動が促進されるという見方(4)や、その逆に、コミュニケーション活動が抑制されるという見方など、さまざまにとらえ方が現れて来ている。しかし、さきの「一台」という点にウエイトをおいて、テレビ視聴そのものを考えてみると、家族の中の誰かが、あるテレビ番組をみるに至るまでの家族成員間の相互作用を無視することはできない。

別のいい方をすれば、家庭内の複数視聴動機が、どのようなプロセスを経て、単数視聴行動に収斂されるかということである。これをグループ・ダイナミクスという「集団の課題解決」のひとつの形というふうにも考えることができる。だが、その集団が家族であるということはある意味で、特殊な相互作用の形を示す。

すなわち、「集団の課題解決」とはいつでも、比較的平等な実験集団でのことではなく、「親子」という生物学的、

あるいは社会・文化的な関係をもった成員間の相互作用である。子供の社会化に大きな役割を果す親の存在は、子供のテレビ視聴にも、場合によっては「しつけ」という形で作用する可能性をもっている。「特殊な相互作用」といったのは、このような位置関係、役割関係を含んでのことである。

ところで、従来、家庭内の人間関係は、主として心理学的な観点から、夫婦・親子・きょうだい、といった形で、様々な研究が行なわれている。とくに、親子関係では、子供の人格形成への作用、あるいはしつけの型とその子供への影響といった研究例を数多くみることができる。

しかし、辻正三がのべているように、「これまでのおもな家族研究は、社会制度としての静的な研究か、人格形成の条件としての家族間の対人関係の研究が多く、集団としての家族を力動的に取り扱った研究は比較的少なかった」ということも事実であろう。

K・レヴィンの場理論的アプローチ⁽⁷⁾や、P・ハーブストの家族関係の客観的な測定⁽⁸⁾、あるいは、T・パーソンズやベールスの相互作用論⁽⁹⁾、またF・ストロドトベックの親子三人の小集団としての相互作用の研究など、小集団研究の隆盛とともに、ようやく、この方面での研究が進められてきている。

以上の考察から、家庭にテレビが一台しかないという条件で、集団としての家族の成員相互の関係を力動的に取り扱い、そこから、テレビ視聴行動の認識に向おうとするアプローチを考えることができる⁽¹¹⁾。このペーパーは、このような試みからなされた調査の結果報告の一部である⁽¹²⁾。

(1) 中部日本放送『日本民間放送史』一九五九年

(2) NHK・総合放送文化研究所編『放送学研究』8号一九六四年、9号・10号一九六五年——特集・日本におけるテレビ普及の

- (3) 前掲書10号45頁(辻村明担当)
- (4) 南博『マス・コミュニケーション入門―現代を支配するもの―』一九六〇年
- (5) 清水幾太郎「テレビジョン時代」『思想』一九五八年十一月二二―二三頁
- (6) 千輪浩編『社会心理学』一九五七年一三二頁
- (7) K・レヴィン(末永俊郎訳)『社会的葛藤の解決』一九五四年
- (8) Herbst, P. G., "The measurement of family relationships" Hum. Relat., 1952.
- (9) Parsons, T. & Bales, R. F., "Family, Socialization and Interaction" 1955.
- (10) Shostak, F. L. "The family as a three-person group" in Hare, A. P. et al. ed. Small Groups 1955.
- (11) この方向でのマプローチにはたとえは次のようなものがみられる。
依田新編「テレビの児童に及ぼす影響」一九六四年第八章「テレビと家族関係」
Forsey, S. D. "The influence of family structures upon the patterns and effects of family viewing" in Arons, L. Television and Human Behavior, 1963.
- (12) この調査は、HBC、TBS、CBC、ABC、RKB毎日の民放五社の調査連絡会議で行なわれた一九六五年度調査の、ABC相当の「家族とテレビ」調査を指している。この一九六五年度調査の総合報告書は一九六六年春に『日本の視聴者』として刊行される予定である。その中の「9・家庭テレビの時代」は、筆者が「テレビ視聴のルール」を中心にとめたものである。なおこの調査の計画は大阪女子大木下富雄助教・ABC管理部瀬尾克忠・同夏目信と筆者が共同で行ない、結果分析は筆者が行なった。

二、調査の対象と方法

調査の対象と方法

この調査は子供を対象にした第一次調査と、母親を対象とした第二次調査にわかれる。

第一次調査は、大阪市内の四つの小学校⁽¹⁾の五、六年男女児童全員を対象に、教室で質問紙法による集団記入(自記)

テレビ視聴行動認識の一視角

調査を行なった。

第二次調査では、第一次調査の結果から

①家にテレビ・セットが一台ある。

②家族構成が、父・母・子のいわゆる核家族で、子供の数が二人ないし四人（したがって家族人数は四人ないし六人）である。

③親子関係テスト（後述）で、放任型、溺愛型、専制型、民主型のいずれかに分類される。

という三つの条件をすべて備えたもののみを抽出し、そのすべてについて、こんどは母親を対象に面接調査を行なった。

その結果、第二次調査の回収数は一七五であった。以下の分析ではこの一七五の家庭の、④子供による回答（第一次調査から）、⑤母親による回答（第二次調査から）、の二種類のデータ系列を用いる。

「親子関係タイプ」

この調査で用いた親子関係テストは、石黒大義、藤原喜悦の親のしつけ態度についての質問紙法による研究の結果を利用した。

前にも述べたとおり、家庭内でのテレビ視聴行動をとり上げる時、家族成員間の相互作用を無視することはできない。なかでも、子供の視聴行動を考える時には、子供どうしの相互作用とともに、子供と親の関係のしかたが相当大きな意味をもっていることが考えられる。そして、この子供と親との関係は、親の子供に対する「しつけ」という点で、もつともきわだって特徴づけられる。

フォーセイは、家族の視聴行動を家族構造との相関でみようとすると分析プランを提示しているが、その中で、家族構造を家族間の仕事の役割分担などから民主的・自治的・専制的・平均的の四つに分類している。

われわれの調査では分析の対象が、とくに一台のテレビをめぐる家族成員の葛藤、なかでもその中心に子供を設定し

たので、そこに、もっともかかわりを持つものとしての親のしつけ態度によって、分類を試みた。(以下これを、ここでは「親子関係タイプ」とよぶことにする。)

石黒・藤原の質問紙によれば、「放任型」「溺愛型」「専制型」「民主型」の四つ、および、いずれにも入らないその他に分類される。

前述のように、第一次調査から、その他をはずきこの四つの型のいずれかに入るもののみをえらんで、第二次調査を行なった。第二次調査でも、同様の質問を母親について行なったが、子供の答との間には、親子関係タイプについては相関が認められなかった。

以下、「親子関係タイプ」という場合には、子供の答(第一次調査)により分類されたものである。

なお、この「親子関係タイプ」の中で「溺愛型」は一七五家庭のうち一家庭にしか見出されなかったため、タイプ別の分析・相関表の時には、この「溺愛型」をはずき、三つのタイプのみを取扱う。

(1) 大阪府科学教育センターの協力をえて、地域差などを考慮して、小学校を選定した。調査対象児童数は約一六〇〇人。

(2) 石黒大義・藤原喜悦「親のしつけ態度—質問紙法による一研究」『児童心理』第八巻第七号(昭和二十九年七月)七七頁—八四頁

(3) Forsey, S. D. "The influence of family structures upon the patterns and effects of family viewing" in Arons, L. et al ed. *Television and Human Behavior*, 1963.

三、テレビに対する意見と視聴動機

このペイパーでは、以上の調査の結果から、とくにテレビ視聴をめぐる家族成員間の「争い」と、このような「争い」や子供のテレビ視聴に対する「親の関係の仕方」の二点について、△親子関係タイプ▽△家族成員のテレビに

テレビ視聴行動認識の一視角

対する意見・視聴動機 \checkmark のちがいを手掛りに、簡単な分析を試みてみよう。
親子関係タイプについては、すでに若干ふれたので、まず、テレビに対する意見、およびテレビ視聴動機について、調査結果を簡単にのべておこう。

テレビに対する意見

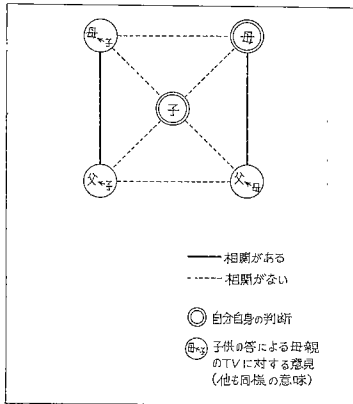
テレビに対する意見とは、ここでは、テレビをどのように考えているかということ、項目をブレイクダウンして、おいて、「いちばん近いものを一つ」選択するという質問形式により答を求めたものである。

第1表 テレビに対する意見 単位(%)

意見	子供の答		母親の答		わからぬ	計
	子供(自身)	母親	母親(自身)	父親		
家にいながら楽しめるし、いろいろな知識がえられるので大変よい	0.6	5.7	1.1	2.9	10.3	100
人々にくつろぎや楽しさを与えるので決してくだらないとは思わない	13.7	26.9	14.9	25.1	24.0	100
くだらない番組も多いと思うが、よい番組も少なくない(まあこんなものだ)	37.7	25.1	25.1	34.3	25.1	100
テレビなんてよい番組がないし、くだらない	37.7	4.0	58.9	36.6	25.1	100

子供による答、母親による答の結果は第1表のとおりである。(それぞれ自分自身の意見と共に、子供に対しては父はどうか、母はどうか、また母親に対しては主人(父)はどうか、という形で、回答を求めた)。

子供による答では、子供(自分自身)の意見と、父・母の意見とはかなりの相違がみられ、父・母の意見はやや批判的な見方に傾斜している。これに対し、母親による答では、



第1図 テレビに対する意見の関程度

第2表 テレビ視聴動機（子供の答）単位（%）

	その他	ほかにすることがないから	家族がみているのでつられてみる	テレビをみていないと友達と話すとき困るから	ニュースなど世の中のできごとがわかるから	ためになる番組があるから	みていて面白く楽しいから
(%)	2.9	11.4	14.3	4.6	41.1	41.1	82.3

注) 答は多項選択なので%の合計は100を越える。

の場合、父・母の意見は相対的に批判的に批判的であり、母親の場合、父・母の意見はテレビに対して肯定的な傾向が強い。

テレビ視聴動機

また、テレビをなぜ見るか、というテレビ視聴動機の結果は、第2表および第3表のとおりである。

第2表は子供の自分自身に対する答である。項目をブレイクディングし、多項選択を許したので、百分率の合計は一〇〇を越えている。ここでは「みてい

テレビ視聴行動認識の一視角

父・母ともに、どちらかといえば肯定的な方への傾斜がみられる。それぞれ、五グループの意見系列の相互の関係の度合をとってみると、第1図のように、それぞれの答での、父の意見と母の意見の間でだけ相関があることが認められる。

以上の結果は、次の三点にまとめることができる。①子供の判断、母親の判断ともに、「テレビに対する意見は、父、母ともかなり似ている」。②しかし、子供の判断する父・母の意見と、母親の判断する父・母の意見との間には相関が認められない（ちがったところで、それぞれ「似ている」と考えている）。③子供

第3表 テレビ視聴動機（母親の答） 単位（%）

	計	その他	ひまつぶし	疲れをとり、骨休めになる	家族につられてみる	好きな番組がみられる	いながらにして芝居や実演がみられる	教養・知識がえられたためになる	みていて面白く楽しい
母	100	4.0	17.7	10.9	9.1	4.6	0.6	26.9	26.3
父	100	7.4	18.9	10.3	9.7	18.3	1.7	13.1	20.6

注) フリーアンサーを結果の処理の際に「表」のいずれかの項目にはめこんだ。

第4表 テレビに対する意見と視聴動機との

相関表 (子供の場合)

単位 (%)

意見 動機	テレビなんてよい番組がないらしくだらしない	思うがよい番組も少なくない	くだらない番組も多し	を与えるので決してくだらないとは思わない	人々にくつろぎや楽しさを与えるので大変よい	いろいろな知識がえられるので大変よい	家にいながら楽しめる	わからない	計
みていて面白く楽しいから	0.7	11.8	40.3	36.8	10.4	100			
ためになる番組があるから	0	15.3	36.1	40.3	8.3	100			
ニュースなど世界のできごとがわかるから	0	12.5	34.7	43.1	9.7	100			
テレビをみていないと友だちと話すとき困るから	0	12.5	25.0	37.5	25.0	100			
家族がみているのでつられてみる	0	4.0	48.0	36.0	12.0	100			
ほかにすることがないから	0	5.0	60.0	15.0	20.0	100			
その他	0	20.0	20.0	40.0	20.0	100			

テレビ視聴行動認識の一視角

て面白く楽しいから」と答えたものが八割以上あり、「テレビをみていないと友だちと話すとき困るから」という、家族以外の集団的規制による動機は、この調査では大きなウェイトを持っていない結果が現われている。つまり、そういった集団関係から来る動機よりは、テレビの娯楽・教養的なものにかなり片寄っていることがうかがえる。

一方、母親による答(第3表)は、質問方法(第3表の注を参照)が子供の場合と違っているので、厳密に比較することはできないが、それでも子供とはやや違った傾向がみられる。それは、娯楽・教養という面に加えて、両親の場合、休養とかひまつぶしといった日常生活的な要素がかなりのウェイトで入っていることである。家庭の中のテレビのおとなの使い方といったものが、このあたりに一つの象徴として出ているようにも思える。

また、父・母の視聴動機を比較してみると、「教養・知識がえられる云々」では母親の方が多く、「好きな番組がみられる」という点では父親の方が多し。ともに母親による答であることを考慮しなければならぬが、母親の教養主義的傾向、「好きな番組」は父親の方が多く見られるということなど、テレビをめぐるの、父と母親の考えや行動のちがいの一端を見ることが出来る。

意見・動機の相関

それでは、このような、意見と視聴動機との関連はど

第5表 テレビに対する意見と視聴動機との

相関表 (母親の場合)

単位 (%)

意見 動機	意見				わからぬ	計
	ない	少ない	多い	わからない		
みていて面白く楽しい	4.3	17.4	19.6	58.7	0	100
教育・知識がえられるためになる	0	8.5	17.0	74.5	0	100
いながらにして芝居や実演がみられる	0	0	0	100.0	0	100
好きな番組がみられる	0	0	25.0	75.0	0	100
家族につられてみる	0	12.5	50.0	37.5	0	100
疲れをとり、骨休めになる	0	26.3	42.1	31.6	0	100
ひまつぶし	0	12.9	25.8	61.3	0	100
その他	0	42.9	14.3	42.9	0	100

第6表は、子供の答による結果で、注意のある・なしについては、親子関係タイプのちがいにかかわらず、およそ九三〇九五〇くらいが注意をされることがある、と答えている。

放任型においてもこのような結果が出ていることは、家庭内の子供—親の関係の中で、テレビ視聴がいかに大きな意味を持っているかを示している。

テレビ視聴行動認識の一視角

のようになっているか。子供の意見と動機、母親の意見の見と動機の相関を示したのが第4表と第5表である。

(1) ここでいう「動機」とは、いちおう「ある場面でのその人の行動を決定する意識的原因」と考えているが、調査上の制約やその処理の仕方などから、カテゴリーの作り方にかなりルーズなところがあることは否めない。

四、子供のテレビ視聴に対する

両親の注意

親子関係タイプとの相関

子供のテレビ視聴について、親が注意することがあるかどうか、また、注意する時どのような状況の時か、これらはテレビ視聴についてのごとく一般的な親のかかわり方である。

第6表 テレビをみている時両親からの注意の
有無・その状況（子供の答）

単位(%)

	注意されることが「ある」	(注意される時の状況) = M. A.								注意されることが「ない」
		長い間テレビをみている時	夜おそくまでみている時	つまらない番組をみている時	ほかの人がみたいのをみせない時	ほかに人がみたいのをみせない時	勉強しながらテレビをみている時	テレビばかりみていて手伝いをしない時	その他	
全 体	93.7	33.7	46.9	26.3	9.7	41.7	17.7	14.9	6.3	
親子関係タイプ	放任	93.3	16.7	43.3	10.0	10.0	33.3	10.0	6.7	
	専制	94.9	41.0	48.7	30.8	15.4	43.6	20.5	12.8	
	民主	93.3	35.2	47.6	29.5	7.6	41.9	19.0	18.1	

テレビ視聴行動認識の一視角

たとえば、視聴動機Ⅱ「家族につられてみる」「疲れをとり骨休めになる」という母親のところでは、「注意」があるがそのほかのものに比べてやや少ない程度で、親子関係タイプの時(第6表)にみられた「注意」の状況での相違はほ

しかし、注意される状況(多項選択を許した)をみると、親子関係タイプによるちがいが現れている。すなわち、「長い間テレビをみている時」で、放任型が最も少なく、また、専制型の子供は、いずれの状況でも、他の型より注意されることが比較的多い。

このようなことから、親子関係タイプが、子供のテレビ視聴に必要なかわりあいを持っていることがわかる。今日のテレビの持っている性格からいって、たんに注意のある・なしというレベルでは、ほとんど差がないのに比べ、注意される状況で、親子関係タイプが大いに関係してくる。これは明らかに、「子供に及ぼすテレビの影響」という問題を考える場合、ひとつの重要な視点——日頃の親のしつけ態度と具体的な状況との関連——を示唆しているといえるだろう。

テレビに対する意見・視聴動機との相関

次に、母親のテレビに対する意見や視聴動機がちがいによって、このような「注意」の現れ方の相違をみてみよう。

第7表は、「注意」についての子供の答と、母親の意見・視聴動機との相関表である。

第7表 両親の注意と母親の意見・動機との相関表 単位(%)

テレビ視聴行動認識の一視角

	(子供の答)	計	注 意 の し		注 意 さ れ る 時 の 状 況						
			あ る	な い	長 い 時 間 テ レ ビ を み て	夜 お そ く ま で み て い	つ ま ら な い 番 組 を み	ほ か の 人 が み た い の を み せ な い 時	勉 強 し な が ら テ レ ビ を み て い る 時	テ レ ビ ば か り み て い る 時	そ の 他
全 体		100	93.7	6.3	33.7	46.9	26.3	9.7	41.7	17.7	14.9
母親の意見(母親の答) 母親のテレビに対する	テレビなんてよい 番組がないしくだ らない	100*	100	0	0	0	50.0	50.0	50.0	0	0
	くだらない番組も 多いと思うがよい 番組も少なくない	100	96.2	3.8	38.4	42.3	26.9	3.8	30.8	15.4	7.7
	人々にくつろぎのや しみを与えたいの で決まらぬ	100	86.4	13.6	29.6	43.2	22.7	9.1	45.5	15.9	13.6
	家にいながら楽し めるし、いろいろ 知識が与えられる ので大変よい	100	96.1	3.9	34.9	50.5	27.2	10.7	42.7	19.4	17.5
母親のテレビ視聴動機 (母親の答)	みていて面白く楽 しい	100	95.6	4.4	32.6	41.3	26.1	8.7	43.5	15.2	15.2
	教養・知識がえら れたためになる	100	91.5	8.5	27.7	44.6	34.1	10.6	40.5	14.9	17.0
	いながらにして、 芝居や実演がみら れる	100*	100	0	0	0	0	100	100	0	0
	好きな番組がみら れる	100*	100	0	37.5	62.5	50.0	12.5	25.0	12.5	25.0
	家族につられてみ る	100	87.5	12.5	37.5	43.7	18.7	12.5	50.0	37.5	6.3
	疲れをとり、骨休 めになる	100	88.9	11.1	36.8	47.4	26.3	5.3	42.1	10.5	21.0
	ひまつぶし	100	93.5	6.5	35.5	58.1	12.9	6.5	32.3	22.6	12.9
	その他	100*	100	0	57.1	42.9	28.6	14.3	71.5	14.3	0

*は100%が10例以下の少数である。

とんどみられない。

父の意見・動機についても同様の結果がみられる。

すなわち、父、母の意見、視聴動機は「注意」にほとんど関係がない、といえるだろう。

五、テレビ視聴をめぐる「争い」

親子の認識のちがい

テレビをみるとき、家族成員間で、みたい番組について意見の合わないこと¹¹争いがあるかどうか、という点について、第8表は子供の答、第9表は母親の答の結果である。

まず、両方の答の全体を比較してみると、明らかに、両者の認識のちがいがみとめられる。子供の方が母親より、争いの度合を比較的少い方に評定している。「よくある」「ときどきある」の合計で、子供の答は三九%、母親の答は六一%と相当のひらきがある。

このことは、同じような現象に対して、子供と母親の認識は必ずしも一致しない。むしろかなり相違があることを示している。この「意見のくいちがいがい」という現象だけではなく、家庭内のテレビの見方について「ルール」があるかどうか、またその「ルール」がうまく（満足的に）運用されているかどうか、といった事象についても、子供と母親とはかなりちがった答⁽¹⁾が出ている。

このようなことは、調査対象のちがいによって同じ事項を質問しても、違った答が出るという、調査方法上の問題とともに、なおそれ以上に、テレビについての子供と母親のかかわり方のちがいを示している、いうことができる。

親子関係タイプとの相関

次に、親子関係タイプ別にみると、子供の答（第8表）では、民主型がやや少なく、放任型は「よくある」「ときど

第8表 みたいテレビ番組について家族成長間で意見の
合わないことがあるか？（子供の答） 単位（％）

		よくある	ときどきある	たまにある	ほとんどない	ぜんぜんない	わからない	計
親子関係	放任	23.3	30.0	16.7	10.0	13.3	6.7	100
	専制	5.1	46.2	33.3	15.4	0	0	100
	民主	6.7	23.8	44.8	18.1	1.0	0	100

第9表 みたいテレビ番組について家族成員間で意見の
合わないことがあるか？（母親の答） 単位（％）

		よくある	ときどきある	たまにある	ほとんどない	ぜんぜんない	わからない	計
親子関係	放任	23.3	53.3	3.3	16.7	3.3	0	100
	専制	20.5	28.2	17.9	30.8	2.6	0	100
	民主	19.0	41.0	9.5	24.8	5.7	0	100

「ぜんぜんない」が五〇％を越える一方、「ぜんぜんない」も一三％あることが多くに目立っている。母親の答（第9表）では、このような放任型のパターンはくずれて、「よくある」「ときどきある」に八〇％近くも片寄り、「ぜんぜんない」では各タイプとも、ほとんど同じくらい現れている。

このことは、誰と意見が合わないか、ということとも大いに関係があること
で、専制型、民主型では、「父と子」「子と子」という組合わせがほぼ三五％～四〇％であるのに対し、放任型では「父と子」が一六％、「子と子」が

七二％もあることを考えれば、その理由はおおよそ推測することができる。
すなわち、放任型では争いが「子と子」という組合わせに片寄っているため、子供と母親の認識に、極端なちがいでできたのであろう。

また、子供の答（第8表）の相違を別の面からみるデータとして、夜の一週間の各局の番組表を子供に提示し、「いつも見ているもの（ⅡA）」、「そのうちとくに好きなもの（ⅡB）」、「好きだがみられないもの（ⅡC）」の三種に分類

第10表 意見がくいちがった時の解決方法（子供の答） 単位（％）

		み たい 番 組 を き め る	じ ゃ ん け ん を し て み たい 番 組 を き め る	な ん と か 話 し 合 っ て み たい 番 組 を き め る	こ う た い で 、 み る 順 番 を き め る	自 分 の み たい 番 組 は 必 ら ず み る	自 分 の み たい 相 手 の 番 組 を み る	自 分 の み たい 番 組 を あ き ら め る	テ レ ビ を み る の を あ き ら め る	そ の 他	わ か ら な い	数 意 見 の 合 わ な い 総 数
親 タ 子 関 係 プ	放 任	14.3	14.3	19.0	9.5	33.3	4.8	4.8	0	100		
	専 制	11.8	8.8	20.6	11.8	35.3	5.9	2.9	5.9	100		
	民 主	38.5	6.4	21.8	5.1	25.6	7.7	3.8	2.6	100		

第11表 家族成員間のみたい番組のくいちがいの度合と
母親の意見・動機との相関表（母親の答） 単位（％）

		よ く あ る	と き ど き あ る	た ま に あ る	ほ と ん ど な い	ぜ ん ぜ ん な い	計
母 に 対 す る テ レ ビ 意 見	テレビなんてよい番組がないしく だらしない	0	50.0	0	50.0	0	100*
	くだらない番組も多いと思うがよ い番組も少なくない	15.4	46.2	23.1	15.4	0	100
	人々にくつろぎや楽しみを与えるの で決してくだらないとは思わない	20.5	38.6	9.1	27.3	4.5	100
	家にいながら楽しめるし、いろい ろな知識がえられるので大変よい	21.4	39.8	7.8	25.2	5.8	100
	みていて面白く楽しい	8.7	54.3	10.9	23.9	2.2	100
母 親 の テ レ ビ 視 聴 動 機	教養・知識がえられてためになる	34.0	40.4	4.3	17.0	4.3	100
	いながらにして芝居や実演がみら れる	0	0	0	0	100	100*
	好きな番組がみられる	37.5	0	50.0	12.5	0	100*
	家族につられてみる	25.0	25.0	12.5	31.3	6.3	100
	疲れをとり・骨休めになる	15.8	36.8	10.5	26.3	10.5	100
	ひまつぶし	12.9	41.9	0	41.9	3.2	100
	その他	14.3	42.9	42.9	0	0	100*

* は100%が10例以下の少数

して答えさせた中から、 $\frac{A}{A+C}$ という数値を計算してみると、放任型Ⅱ一五・一、専制型Ⅱ二一・三、民主型Ⅱ二

〇・三となり、この結果から、やはり放任型が、比較的阻害されずに、テレビを見ていることが読み取れる。

さらに、意見の合わない時の解決方法について、第10表に親子関係タイプ別の結果を示しておこう。ここでもタイプ別のちがいが明瞭に出ているが、詳細な論議は他にゆずることにする。

テレビに対する意見・視聴動機との相関

次に、母親の答による、意見の不一致の度合と、その意見・視聴動機との相関をみてみよう。第11表がその相関表である。

ここからは、とくにきわだったちがいを見つけることはできなかった。強いていえば、視聴動機で、「教養・知識」で争いがやや多く（「よくある」「ときどきある」の合計が七五%ほど）、逆に「家族につられて」「骨休め」「ひまつぶし」で、争いが少ない率がやや多い（「ほとんどない」「全然ない」の合計が四〇%前後）、ていどである。

(1) 民放五社調査研究会編『日本の視聴者』一九六六年「9・家庭テレビの時代」

(2) 前掲書

六、テレビ視聴をめぐる子供どうしの「争い」に対する親の関係のしかた

前項では、一般的な家族成員間の意見の不一致 \parallel 争い、という形をみて来たが、ここではその中で、「みたいテレビ番組についてのきょうだいゲンカ」という点にしばって、親のこれに対する関係の仕方をみよう。

第12表・第13表は、それぞれこれに対する子供の答、母親の答の結果である。

ここでも、前にのべたように、同じ事象に対する親子の認識のちがいが現れている。各項目それぞれについて、二つの表の数値のちがいは興味深い。子供の答では、両親がかなり批判的に関与して来る傾向が強いのに反し、母親の答で

第12表 みたい番組できょうだいゲンカが起きた時、
両親はどうするか？（子供の答） 単位（%）

		た	あ	を	両	い	談	両	す	両	そ	わ	計
		た	あ	を	を	を	に	親	する	親	他	か	
全	体	9.1	2.9	2.9	7.4	28.7	37.7	3.4	10.9	100			
親	放	10.0	3.3	20.0	10.0	43.3	0	13.3	100				
	専	7.7	2.6	10.3	23.1	41.0	7.7	7.7	100				
	民	9.5	2.9	2.9	36.2	34.3	2.9	11.4	100				

第13表 みたい番組で、きょうだいゲンカが起きた時、
両親はどうするか？（母親の答） 単位（%）

		た	あ	私	私	私	私	私	そ	計
		た	あ	や	や	や	や	や	他	
全	体	23.4	12.0	25.1	22.9	11.4	5.1	100		
親	放	16.7	20.0	33.3	20.0	3.3	6.7	100		
	専	25.6	7.7	23.1	17.9	17.9	7.7	100		
	民	24.8	11.4	22.9	25.7	11.4	3.8	100		

は、かなりゆるやかである。

親子関係タイプとの相関

親子関係タイプ別にみると、たとえば「テレビを消してしまふ」というのは、子供の答では放任型が多いのに、母親の答では放任型が極端に少ない。一方「何も言わない」と「相談にのる」とでは、子供の答で、放任専制、民主のパーセントが逆になっている、親子関係タイプとの相関が認められる。またこれは母親の答でも（子供の答ほど明瞭ではないが）あるていど同じような傾向を示している。が「一方的にきめる」では、

専制型で、子供・母親の答とも非常に低い（子供の答では他の型も低い）、母親の答では、他の型とはっきり差が認められる）のは、親子関係タイプから直接考えられることとはまったく逆の結果である。

父母のテレビに対する意見との相関

第14表 両親の關係のしかたと母・父のテレビに対する
意見との相關表（ともに子供の答）

單位（%）

		た	る	ない	め	す	そ	わ	計
		あらそいは起き たことがない	両親が一方的にきめ る番組にきめ	両親は何も言わ ない	両親が番組のき め方について相 談にのる	両親はケンカを するなという しなえという	その他	わからない	
全 体		9.1	2.9	7.4	28.6	37.7	3.4	10.9	100
母親のテレビに対する意見	テレビなんてよい番組 がないしくだらない	10.0	0	10.0	30.0	30.0	10.0	10.0	100
	くだらない番組も多い と思うがよい番組も少 なくない	8.5	6.4	8.5	27.7	36.2	0	12.8	100
	人々にくつろぎや楽し みを与えるので決して くだらないとは思わな い	4.5	2.3	2.3	29.5	43.2	4.5	13.6	100
	家にいながら楽しめる し、いろいろな知識が えられるので大変よい	9.4	3.1	6.3	37.5	34.4	3.1	6.3	100
	わからない	14.3	0	11.9	21.4	38.1	4.8	9.5	100
父親のテレビに対する意見	テレビなんてよい番組 がないしくだらない	0	0	0	14.3	85.7	0	0	100
	くだらない番組も多い と思うがよい番組も少 なくない	4.8	4.8	4.8	33.9	40.3	1.6	9.7	100
	人々にくつろぎや楽し みを与えるので決して くだらないとは思わな い	12.9	0	3.2	38.7	25.8	3.2	16.1	100
	家にいながら楽しめる し、いろいろな知識が えられるので大変よい	16.1	3.2	6.5	25.8	38.7	0	9.7	100
	わからない	9.1	2.3	15.9	18.2	34.1	9.1	11.4	100

テレビ視聴行動認識の一視角

第14表は、子供がみた父・母のテレビに対する意見との相關表であるが、これをみると、母の意見はあまり関係ないが、父の意見が、きょうだいゲンカへのかかわり方にかなり関係がある。

すなわち、「テレビはくだらない」という意見の父（子供の判断）の八六%もが、「けてしまえ」という態度に出ると、子供が答えているし、テレビに対する意見が比較的肯定的なもの、わりにおだやかな關係のしかたを示している。

このようにみると、先の第12表と第13表のちが

いは、子と母というちがいでみたが、子供の判断にはかなり父親の行動が強く働いていることが考えられる。

七、あとがき

今日、テレビの視聴行動⇨受容過程に多くの関心が向けられている。その背景になっているもののひとつに、マス・メディアの中で大きな意味をもってきているテレビの 대중に対する効果や影響の問題が考えられる。なかでも「子供に及ぼすテレビの影響」が、テレビ初期から、中心的な問題として（ヨーロッパでもアメリカでも、日本でも）種々論じられてきている。

シュラムは、このようなテレビの影響についての諸研究のレビュー(1)の中で、今後、短期間の研究ではなく、テレビの累積的影響について、長期的な、詳細な、実験的・臨床的研究が必要であることを強調している。

そして、テレビについての、この種の研究は、たいてい、テレビがマス・メディアとして何を伝えるかという番組条件と、受け手（とくに子供）の諸要因との相互関係の解明に向けられている。

たとえば、シュラムらは、このような相互関係からテレビの影響をみるために、最少の変数として、テレビ番組では「ファンタジィ」と「リアリティ」の二要因、子供側の変数として、知能、社会的規範、社会関係（家族、友人などの集団関係）、それに性と年齢を取り上げている。(2)

このペーパーは、影響・効果というレベルではなく、もっと一般的なテレビ視聴行動そのものをとらえる一つの方法として、むしろテレビが何を伝えるか（テレビの送出内容）を捨象し、もっぱら、物理的に家庭に置かれた一台のテレビ・セットをめぐる、家族成員の間で、どのような相互作用が行なわれるか、という点に視点をすえた問題から出発した。

そして、なかでも、子供のテレビ視聴について両親のかかわり方を取りあげ、その説明要因として、親のしつけ態度

から引き出された親子関係タイプと、(主に)父・母のテレビに対する意見、視聴動機を用いた。

全体的な傾向からいえば、親子関係タイプ別に、比較的有意な違いが見出されたのに対し、意見、視聴動機については、あまり違いが発見できなかった。また、副産物として、同じ家庭内の現象について、子供と母親の認識のちがいが、ある方向でみられた。

このことは、まえがきでのべたとおり、テレビ視聴行動を理解する時、家族成員の関係が重要な意味をもっていることを示している。とくに、子供のテレビ視聴には、子供と両親との日常的な関係のしかたが大きく作用している、しかも、子供の事象認識と親のそれとのくいちがいが、子供が親をどういうふうに見ているか、ということが、子供のテレビ視聴行動分析への一つの手がかりを示している。

それにはたんに「しつけ」の態度だけではなく、それをも含んだもっと巾ひろい領域で、親子関係をみる必要がある。だから、この分析で用いた「親子関係タイプ」(親のしつけ態度から出発したもの)をさらに基本的・普遍的な親子関係パターンへと発展させる必要があるだろう。その時には、調査上、操作的な概念規定しかしていない「テレビに対する意見」「視聴動機」を、このような方向から検討しなおしてみる必要もおのずと生じて来るだろう。

このパイパーは、以上のような意味で、テレビ視聴行動分析への、一つの踏み台であり、試みにすぎない。

- (1) Schramm, W. ed. "The Effects of Television on Children and Adolescents: An annotated bibliography with an introductory overview of research results" Reports and papers on Mass Communication, No. 43, UNESCO, 1964.
- (2) Schramm, W, Lyle, J, & Parker, E. B., "Television in the Lives of our Children" 1961.
- (3) たとえば Kaplan, L., "Foundations of Human Behavior" 1965, だが、親子の相互関係(ターナメント) rejection, overprotection, domination, overindulgence をあつらへる。